御 崎 馬 の 研 究

西 田 周 作・安 樂 久 美 也・稻 澤 昭 (宮崎農林専門學校畜産學教室)

Studies on the Misaki horse, a native breed in south Kyushu.

S. NISHIDA, K. ANRAKU and A. INAZAWA. (Miyazani College of Agriculture and Forestry)

我國の馬産は今、大きな變革の過程に入ろうとしている。軍規格の産馬の用途が失われたと言うのではないが、それも検討を要することとなり、農馬の問題が新に重要性を加えてきた。この際、我國在來のいわゆる土産馬に對して再検討が加えられることは意義のあることだろう。土産馬としては、北海道土産馬、木曾馬など有名であるが九州でも鹿児島宮崎南部地方は古來馬産地として今日なお純粹に近い土産種をのこす地方がある。なお對馬の對州馬、隱岐馬など注目すべきものもある。ここでは宮崎縣南部に残る土産馬御崎馬についてのべよう。

産地 宮崎縣南那珂郡都井村御崎牧場。(北緯 31°28')

第 1 圖

宮崎縣の最南端、國鐵志布志線福島仲町から約 10 キロ、太平洋に突出した岬が都井岬であつて、それは志布志灣をへだて、大隅の佐多岬に對している。(第 1 及び第 2 圖) 都井岬は長さ約 4 キロ、海拔 300 m 内外の高地をふくみ、高地は北から南に高まつていて、牧場は主にこの高地を占めている。10 數條の溪流があつて放線狀に海に注ぐ。中腹以下は林地 200 m 以上の高地は主に草地である。地質は礫及び砂質壤土である。牧場面積は 473 ヘ

クタール (放牧地 62, 放牧林地 323 ヘクタール)。野草は禾本科を主としシバが多く、ノチギク、チガヤも多い。荳科にはハギがある。林地にはスギ、マツ、雑木が多くゼンマイ、ワラビを生じ、ソテツが自生している。

來歴 御崎牧場は元祿 10 年 8 月秋月藩主が創立し秋月藩の馬匹補充場として七牧の 1 つであつた。廢藩して國有となり明治 7 年都井村及び宮之浦村民が拂下げを受け

155 名が共有し明治 2 年都井村森林組合所屬となつた。

牧馬の系統については明らかでないが、秋月藩の舊記によると、この地方の産馬は、櫛間馬 (或いは串馬)、串間馬と稱し、豊臣秀吉の朝鮮征伐の頃同地から移入したものをその起原とすると言う。都井地方は福島又は串間と呼ばれたことがあり、日向; 特にその南部の串間或いは飢肥などの産馬である舊馬種はほぼ同一の系統に屬す

第 2 圖

るものようで、外來種の影響を受けたことはあつたとしても、それが主流ではなく、古來の日向馬、薩摩馬などと共に日本在來土産馬種とみなしてよいと思われる。**放牧現況** 牧場には隣接畑地との境に柵などが設けられ主な道路にもその設備があるが、充分の施設はなく、年間放牧で人為的給飼は行われない。管理も粗放で一般には都井岬 (御崎) の野生馬と誤り呼ばれている。

牧は 5 群に分れ、1 群に 1 頭の種牡がいる。各群はそれぞれの牧區を占有していて、他群とは混合しない。1 群は都井岬最南端燈臺附近、1 群は牧場の中央高地、他は北端を中心として集團し移動している。現在總頭數約 80 頭、種牡 3 頭、集團のほど定住する場所を立場と呼び、この立場を中心に草を求める。この生活を野立ちと呼んでいる。春夏は群棲し草地帯で野草を食い枯草期に

は灌木莖葉樹皮を食つて、秋冬には群を解き溪谷林間に入る。水は湯内の溪流でのみ、水飲湯も設けられていない。海水をのみに下りることはない。(第3及び第4圖)。

第 3 圖

第 4 圖

蕃殖 3月から6月までを蕃殖季節とし、1群の牝と、その群の牡との間に自由交配が行われる。産駒数は總頭数の約20%であるが死ぬものも少ないので、近年は年産15頭以下になつてゐる。特に戦争末期から戦後は頭数が減少した。産駒の牡は毎年秋季11~12月頃捕えて賣却し、牝は大部分蕃殖用に保存される。

馬種の改良については薩摩藩に種馬を求めたが他蕃であるので果さず、僅に領内に産する榮草榮胡を以て種牡馬と交換したとあるので、薩摩馬を混じた形跡がある。なお明らかに、他からの系統を入れたものとしては、大正2年に牧馬事業再興の議が起り、近親蕃殖の害をのぞくための血液更新の意味及び馬格改良の目的で北海道から種牡「小松」號を入れ、當初1年牧場混牧し、以後民間に飼育し一般牝馬に交配した。「小松」號は明治43年生(體高4.70尺、胸圍5.50尺、管圍0.60尺)その父は内國産洋種第2ポップエークルス號、母は雜種岩

見號とあり、北海道士產馬の血統のものと思われる。

「小松」號と牧場の牝馬のF₁に「第2小松」號なる種牡が産れ(大正15年)、特に體格が優れ(體高4.50尺、胸圍5.50尺、管圍0.58尺)、土產純粹種の後軀の貧弱が是正されてゐたので永年牧場の牝馬と交配し、また一般民間からその牝馬に交配を希望されたので、村内に種牡として飼養した。従つて、現在牧場に放牧される馬が純粹の在來種であるとは斷言できなくなつてゐるが著しく改變されたものでないことは確實である。

體型 放牧馬は人の接近を恐れ、捕えることも容易でなく、正確な體型はほとんど調べられていない。

福島(串間)土產馬と呼ばれたこの地方の舊馬種は體尺3.90~4.10(4.12尺)程度の小さいもので、頭部が大きく額は平圓、眼上窩は淺く、鼻梁は甚しく長く凸線を示し、頬筋の發達はよい。顴骨は高くなく顎凹は深い乾燥してゐない。耳は短い。頸は水平頸。諸長毛は長くない。鬐甲はやゝ高いが延長を缺く。背は直で長い。肋の張りはよくないが強く、腰附はよい。胸前の發育は良い。肩は短直で前位にある。四肢關節はすべて堅く大きい。四肢骨は太く短い。蹄はやゝ狭いが硬く強い。飛節は低くX狀肢勢の傾向がある。歩様は急で短い。毛色は鹿毛、青毛及び栗毛で雜色を見ない。飢肥馬もほとんどこれに近い一般外貌をもつていたと言う。

御崎馬は體高1.30m内外、篠原氏によれば勾配の急な東端の牧場に棲息する群では短軀斜尻が目立ち、傾斜の緩やかな西南部の群ではやゝ長軀で馬格が大ききように見え、四肢は何れも短く上體との均稱はとれてゐるが外貌は概して蒙古馬に類す。皮膚は厚く被毛は粗で保護毛、觸毛は著しく發達しているが、長毛はすり切れてゐる。

同じく篠原氏によれば、頭部の型に2種類があり、頬が狭く鼻梁が長く直、鼻孔狭小、頬筋厚く目は豚眼に類する凡庸の相を呈するものと、他は、額が廣く鼻梁凹短顴骨が發達し楔形の愛相を呈するものがあると言う。

頸礎は一般に低く水平に近く、頭礎部頸礎部の廣さはほとんど等しい。鬐甲は高く短い。胸幅は中等又は狭く胸淺く、背は牡では鯉背が多い。肋は圓と平とあり、下腹は垂下するものが多い。尻は短く傾斜し、腎股の發達は良くない。前膊は中等の發育を示し管繫は短く、後踏外向肢勢、球節以下が甚しい。

毛色は鹿毛、黒鹿毛、青毛で栗毛は少い。星や四肢の白斑は「小松」號が入つて以來現われるようになったもので、純粹御崎馬はこれらの別徴をもたなかつたものの様である。

篠原氏の體型測定數値は次の様なものである。

年齢	體高(尺)	胸 圍	管 圍	胸圍率	管圍率	體長
12	1.50	1.60	0.160	115.0	12.3	長
8	1.47	1.55	0.155	114.0	12.0	短
6	1.57	1.50	0.150	119.0	11.4	短
1	1.12	1.35	0.135	101.8	12.3	

御嶺馬は前述のように、毎年その駒を捕えて市場に出し、農家はこれを求めて調教し、小格役用馬として農耕駄載に用いているので、都井村を中心としこの地方の農

第 5 圖

家にはこの系統の馬が相當數飼養されている。従つてこれら農家に飼養される土産馬は純粹の御嶺馬（多くは牝、従つて騾）、「小松」號の系統のもの、「第2小松」號の系統のものなどを混じ、雜種の頭数は多く純粹のものは少いと考えられるが、飼養されるものについてその體型を測定すると次のような數値が示されるのである。年齢は2~16才、牝 19 頭、去勢牝 5 頭の體型測定平均數値である。

部 位	平 均 (cm)	體 高 指 數	
		い ち け る 御 嶺 馬	い ち け る 御 嶺 馬 × 半 血 種 雜 種 (12頭)
頭 長	55.5±0.270	41.86	40.69
頭 厚	32.1±0.264	24.2	24.00
頸 長	73.7±0.624	55.58	53.27
體 高	132.6±0.436	100.00	100.00
背 高	126.3±0.735	95.24	95.73
尻 高	132.7±0.431	99.92	101.25
體 長	143.0±0.648	107.84	106.11
背 長	56.0±0.460	42.23	40.54
腰 長	29.1±0.473	21.95	23.76
胸 幅	33.8±0.365	29.26	25.61
肩 幅	25.8±0.339	19.46	18.32
胸 深	61.1±0.426	46.03	42.53
胸 圍	157.6±0.722	118.85	120.63
管 圍	16.7±0.076	12.59	12.36
尻 幅	45.2±0.250	34.09	33.63
尻 長	44.5±0.492	34.31	33.41

第 6 圖

A-B	外後頭結節—上顎骨端	48.5 cm
A-D	“—下顎底	23.2
D-E	頭骨の深さ	22.1
C-B	外耳口—上顎骨端	42.0
C-G	“—眼窠後緣	9.5
F-G	眼窠前緣—	5.9
A-L	外後頭結節—眼窠前緣	19.5
L-B	眼窠前緣—上顎骨端	29.0
J-K	下眼窠孔—鼻上顎切痕	7.1
J-M	“—第2臼齒	5.9
N-O	顏 櫛—鼻 骨	9.0
P-Q	眼窠前緣—上顎端	23.7

御嶺牧場内の林間に斃死してその骨格がほとんど完全に保存されていたものを採集し得た（昭和21年11月）のでその骨格について測定した結果を示す。標本は15才の牝である。

第 7 圖

A-B	鼻前頭縫合頂點—顎骨端	24.5
C	顎骨端幅	5.5
D	鼻骨遊離基部幅	7.5
E	顏櫛前端幅	15.0
F	眼窠後緣間幅—(前頭骨幅)	18.5
G	頭頂骨幅	9.3
H	後頭骨幅	5.5
I-J	鼻骨遊離部長	7.5
K-L	後頭結節—前頭櫛前端	14.5

第 8 圖

A—B	後頭鱗—上顎端	47.0
C	上顎端幅	5.5
D	第1白齒間幅	6.5
E	頰櫛前端幅	15.0
F	第6白齒間幅	8.0
G	後鼻口幅	4.6
H	顎關節結節間幅	6.5
I	舌骨突起間幅	7.5
J	外耳口間幅	10.5
K	後頭髁幅	7.8

四 肢 骨

前 肢		後 肢	
肩 胛 骨 長	31.1	股 骨 長	37.7
肩 胛 骨 幅	15.1	股 骨 頭 幅	11.3
上 膊 骨 長	27.5	股 骨 外 髁 幅	9.0
上 膊 滑 車 幅	7.4	下 腿 骨 長	33.2
前 膊 骨 長	33.3	附 前 骨 長	25.9
尺 骨 頭 一 肘 突 起	8.0	附 前 骨 頭 幅	5.0
腕 前 骨 長	21.4	附 前 骨 滑 車 幅	4.7
腕 前 骨 頭 車 幅	5.7	第 1 附 骨 長	7.5
腕 前 骨 滑 車 幅	4.8	第 1 附 骨 圓	10.1
第 1 指 骨 長	7.6	第 2 附 骨 長	4.3
第 1 指 骨 圓	8.9	第 3 附 骨 幅	5.6
第 2 指 骨 長	4.5		
第 3 指 骨 幅	6.3		
腕 骨 長	41.5		
腕 骨 結 節 幅	9.5		
腕 骨 幅	17.0		
腕 骨 幅	19.5		
骨 恥 骨 坐 骨 結 合 部 長	15.2		
坐 骨 幅	10.2		

これらの體型測定數値の細い統計的研究、特にいわゆる改良馬との比較研究は今後の問題である。

御崎馬の飼養 御崎馬及びその系統の馬は南那珂郡の吾田、細田、東郷、南郷及び鹿児島縣大崎地方を主な需要地とし、飼養使役される。主として田畑合せて1町内外の經營農家に飼養され、耕馬として用いられる。飼養家によれば、飼料の消費が少く、ほとんど野草のみで飼ひ、農繁期のみ米糠、雜穀類を僅かに加える程度で飼養管理は極めて樂であると言う。駄馬としては米俵3~4

俵を駄載し5~6時間の運搬に耐え、持久力が大きい。水田作業の耕耘に用いても中半血種に比し1.2~1.5倍の作業を行うことができると言う。健康で疾病に侵され難いが、熊癖をもつものが多い。馴致すれば温順で老幼、婦人の使役に適し山間地の労働に巧みである。

む す び

御崎馬の純粹種は現在なお御崎牧場に残つていて考えられるが、それとても明治以前のものとは多少異なるかも知れない。御崎馬はこのまゝでは絶滅に向うおそれもある。

この産馬自體の研究がなお必要であり、將來の或種の濃馬としての育種素材としても價值があると思われるから、その絶滅を防ぎ、純粹種の保存と或程度の増殖を計る必要があると考えられる。

文 献

- 篠原哲二 1932. (昭7) 都井牧場の馬
宮崎縣經濟部 種牡馬名簿 - 明治30~昭和21年
黒木四男 1935. 御崎馬 - 就テ 宮崎高農卒業論文
佐々木良 1935. 野生狀態に保存せられた御崎馬宮崎の自然と生物。宮崎高農 (昭10)
宮崎縣 (明治43年) 宮崎縣畜産小史
野邊幾衛 都井村史

Résumé

Misaki pasture is situated in the peninsula called Toi, the most southern part of Miyazaki prefecture in kyushu, and is noted for its native breed of horse. The herd grazes the whole year round without mentioning grain-fodder. With little management horses are not so prolific that the number of them are going to reduce to about eighty now.

The purity of the breed has been retained probably by some of them, while the others are derived from the crossing between pure breed and the stallion introduced from Hokkaido. It is stated that the parents of the stallion were a Hokkaido native horse and a foreign improved one.

We measured the conformation of so-called Misaki horse. It rather resembles to that of the Mongolian horse. The skeleton was also measured. The Misaki horse stands about 133 cm, has heavy head, short neck, and strong legs with hard hoofs.

Attention should be called to this native breed of small horse because of its suitable qualities for some practical importance and for producing the desired breeds of some agricultural uses.